

「サーチャー応援座談会

～2013年のトピックスとサーチャーのDO、サーチャーへのDOを語る～」

3. サーチャーのDO

司会：「サーチャー自身のDO」という点に移りたいと思います。日常心掛けていることは何か、4つの観点からお話してください。

【質問1】サーチャーに向いている人はどんな人が、サーチャーとして採用する際に重視する点は何か、

【質問2】サーチャーとして重要視しなければいけない点は何か。

【質問3】サーチスキルアップのための自己研鑽としてどのような努力をしているか。

【質問4】サーチツールや情報入手の方法についてです。

では、中村さんお願いします。

サーチャーに向いている人、採用したい人

中村：【質問1】まず「サーチャーに向いている人はどういう人か」ですが、私が現在の立場からサーチャーを採用する際に、どういう観点から相手を見ているかをご紹介します。

まず一番に、技術に関してどれだけの意識を持っているかを見ます。すごく高い専門性を持っていることではなく、まず本人のバックグラウンドは何かということ、技術内容を重視して理解をしようと努めることができるかをいろいろ聞きます。これは、相手に技術説明、例えば大学のときにやっていたことを聞いて、それに対して質問する、その回答を聞く、というキャッチボールでだいたい分かります。とにかくこの調査という仕事は技術をきちんと理解しないと絶対にできないので、技術に対する理解力や好奇心、どれだけその技術に興味を持てるかを見ます。

次に大事なのは相手の話をきちんと聞くことができるコミュニケーション力です。調査というのは出す側と受け手側で知識レベルが違うことが多いので、相手に対して自分のことばかりしゃべるのではなく、相手の言っていることをきちんと聞いて、それに対してピントの合った回答ができるかを見ます。あとは説明がきちんと論理的にできるかですが、この2つはかなり重視します。検索の経験などはあまり重視しません。後から勉強でいくらでも習得できますから。

サーチャーと言っても、マネージャーと実務担当のサーチャーは求められるものが少し違うと思います。実務担当のサーチャーは、几帳面さ、きちんとやる、ミスなくやること、あとは愚直にこつこつとまじめにやるのがすごく大事だと思っています。また、結果をごまかさない正直さが大切で、何となく最後をうやむやにするのは、サーチでは絶対にあり得ないです。あとは明るく協調性がある、などといった付帯的なこともあります。

酒井：【質問1】1点目の、サーチャーに向いていると思う人は、中村さんと重なる部分があり、同感とお話を伺っていました。私も小規模ながら人を採用することがあるので、採用のときに見ている観点で言うと、サーチスキルに関連するものでは、例えばデータベースの知識のように暗記すれば分かるものや本を見れば学べるものと、そうではなくてコミュニケーションスキルのようにセンスの問題のようなものと両方あると思います。ある程度それを右左に振り分けて見るようにしています。

サーチャー自身の「DO」自己研鑽

サーチャーに向いている人はどんな人？

- ・コミュニケーションスキル
- ・論理構成力
- ・「捨てる」事ができる素直さ。

サーチャーとして重要視しなければいけない点は？

- ・多角的・多面的な視野。

サーチスキルアップの自己研鑽の努力

- ・異分子との接触

サーチツール、情報に関する入手

- ・人(知人・ベンダー)との情報交換
- ・海外サイトの閲覧 (EPO、PIUG、British Library 等)

あと技術の理解力も基本的な理解力は見ま

すが、独立系の調査会社ですと、基本的にどんな技術分野の依頼が来るか分からないので、社内技術に精通するより、どんな依頼が来ても理解できる理解力が基本的にあるかどうかを見ています。センス的なものは、はっきり言ってしまうと持っているか持っていないかで決めてしまっているところがあります。面接での話のキャッチボールでも、ボタンがどんどん掛け違ってしまう感じだと採らないです。論理的な部分とセンス的な部分、両方それぞれの観点で見るとしています。

それから、実作業で言うと、うっかりしていると私も陥ってしましますが、サーチのことはよく知っているので専門職だといふ思い上がってしまい、検索だとこれが一番良いと思うものを押し付けたいことがあります。そういったプライドを捨てたり、あるいは思い込みを捨てて相手の話や相手がこうしたいという思いを素直に聞いたり、良い意味で自分の思い・押し付けといったものを捨てられる人の方が、相手の意に寄り添う形でサーチができるのではないかと思います。

清水：【質問1】1点目。私自身のことで言えば、私は好奇心のある方だと思います。小学校の高学年から中学生にかけての愛読書は百科事典でした。ただ読むだけでなく、ニュースなどで聞いたことを百科事典の該当する項目に書き込んで自分で更新していました。

自分の経験からすると、サーチャーには門外漢のことで必要なら興味を持って接する、理解しようと努めるといふある程度の好奇心や柔軟性が大事だと思います。

もう1つ、ヘルプデスクをしていたときの経験で言うと、お客様は問題だと思ったから問い合わせて来る訳なので、「相手の問題を自分の問題として考えられる」ことが大切です。

提供側の立場からすれば「仕様通り」でも、相手が問題や疑問ととらえているときには、それを共感するところから出発しなければいけないと思います。このやり方は好き・嫌いがあると思いますが、私には性に合っていたようです。

私は大学のときは歴史を勉強していました。サーチの仕事もちょっと歴史の勉強と考え方が似ていると思うことがあります。データベースの情報はコンピュータの中に蓄積されている情報ですから、利用者は直接目で見られません。検索式という条件を使って自分で取ってきて初めてどうなっているかが分かります。歴史も過去に起こった出来事を実際に目で見ることにはできません。歴史も情報も資料を探したり、検索式を工夫することで引っ張ってこられるものが変わります。そうした結果の中から、これはというものを選んで、そこから総合して全体としてこうなのだろうと考えます。

直接目で見られないものの中から、ピックアップして出てきたものを見て、これはこうなのだなと考える。その考え方自体は歴史・史学の考え方と似ているし、検索はそこが面白いと私は思っています。

中村：そういう捉え方をされますか。目からうろこの感です。

サーチャーとして大切にしていること

司会：有難うございます。【質問2】サーチャーとして重要視しなければいけない点は何か、のお話に移りたいと思います。中村さんお願いします。

中村：【質問2】サーチャーとして業務をするのに重要視しなければいけないことは、何とんでもミスなく確実にやることだと思います。検索式が間違っていた、などは信頼関係を左右する部分です。これは最低限必要なことです。

それ以外に、サーチャーとして重要なのは品質とスピードのバランスです。酒井さんは



(座談会風景2 和やかに、活発に)

よくお分かりだと思いますが、研究者から依頼される調査は、とにかく急いでやってほしい調査と、あと絶対に漏れなく、きちんと丁寧にやってほしい調査の2つに分かれると思

います。その緩急を付けた対応ができるかという、品質とスピードのバランスが大切です。

あとは相手のニーズが調査を進めるに従って微妙に変わったりするので、その空気を読む、唯我独尊にならずに、相手のニーズというか、その辺りの空気を読んで立ち回れるということ、こういった能力は調査スキルがかなり上がってきたからの話だと思いますが、そういったことがサーチャーとしては大事だと思っています。

酒井：【質問2】サーチャーとして重要視していきたい点として、私は「依頼者の視野を広げる」を挙げさせていただきます。依頼者の方というのは当然技術のプロや知財部のプロの方で、専門的に物事を見られているわけですが、サーチャーができることというのは、「こういうものが欲しかったのだよ」という情報を出せるか出せないかが結構大きい気がしています。つまり、依頼者の意識のどこかにはあるのですが、ご本人が見えていないところをお見せすることができるの良いなと思っています。そのためには依頼者の方が見ていない目線で、いろいろな角度から掘ってみることも結構大事ですし、そうなるという言葉がよくないですが、「調査バカ」だとだめかなと思います。

司会：そうすると酒井さん、依頼者から言われる表現とは別の観点から、ひょっとしたら依頼者の頭の片隅でこんなことを考えているのではないかと推測し、そちらからも情報提供することも大事なのですね。

酒井：例えば技術の流れなどで「自分はこういうことをやって、こうこうで、こういうものを作りたい」とおっしゃったとしたら、「もしかして、こういうひねり技などはご覧になったことはありますか」と水を向けてみると、「ああ、そういうの、あるある。それで」と話が膨らむことが意外とあります。

技術系の方は、もちろん個人差はありますが、すごく集中されることが多いので、集中しきっているところを、ちょっとほぐすお手伝いということなのかもしれません。

清水：【質問2】私はサーチャーを採用した経験がありませんが、たくさんのサーチャーの方々にお目にかかった感想から言うと、先ず物事を柔軟に考えられる人、例えば自分の視点だけではなく相手の視点からもみられるような、理解することも含めて物事を柔軟にとらえられるのはサーチャーにとって大事なポイントだと思います。

また、聞き上手で同時に質問も上手な人、自分が分からないことを的確に相手から引き出すという意味で、質問上手な人であることも大切です。

そして、人間は一人ひとり考え方も感じ方も違うわけですから、自分の考えをどうすれば相手に理解してもらえらるだろう、分かってもらえらるだろうと考えて説明しようとする努力も大切です。あとは、常に反省点を見つけられるのも大切です。つまり、これが最高と思わずに反省できるのは、サーチャーとしてステップアップしていく人に共通している大

切な要素の一つかと思います。

司会：ありがとうございます。大ベテランの三人のご意見から、サーチャーとして重要視しなければいけないことが明確になりました。

自分自身を磨く

司会：では、サーチャー自身の D0 の【質問3】「サーチスキルアップの自己研鑽のためにどのような努力をしているか」に移りたいと思います。中村さんお願いします。

中村：【質問3】3点目の自己研鑽のための努力ですが、これは私自身のことと考えるとください。私もマネージャーになって長いですが、常日頃からプレイングマネージャーであるべきと思っていますので、検索を常に実施していきたいと思っています。検索はしていないと勘が鈍りますね。これは必須だと思います。

また、私が部下のサーチャーにいつも言うのは、「結果を丸投げするな。必ず出てきた結果に自ら目を通すこと」です。多くの依頼件数を抱えていると全てに目を通すというのは難しいかもしれませんが、調査結果に目を通さないと、自分のやった検索式の振り返りができませんので、スキルもアップしません。

あと、私がよくやるのは、担当テーマに関して S D I を登録して技術動向を見ることです。これは自分の担当領域に、最近どういう特許が出ているのか動向を見ておかないと、サーチをするときの勘所が鈍ってくる。それには、S D I はすごく大事だと思います。

司会：それはまた注目すべき新しい観点ですね。

中村：S D I をされることをお勧めします。研究者にもやるように言っています。「自分の担当している技術の系譜、流れが読めなくて、出願戦略なんか策定できませんよ」と言っています。

酒井：【質問3】私自身、調査ツールや知財などの最新情報は、一通りアップデートしていますが、本当に勉強になったなと思うのは、知財や特許データベースと全然違う分野のことの方が多いのです。それが視野を広げることに役立っているのかもしれないと自分では思っています。

全く異分子だとなかなか使いどころがないので、例えば監査法人などで M & A を扱われる大手の法人の方に実際の実務のお話を聞くときは、「監査法人でこういう仕事を扱うときは、たぶんこんな感じの調査が欲しいのだろうな」とか、データベースの開発のお話を聞くと、「検索エンジンを作る人はこういうつもりでエンジンを作っているから、特許のデータベースもああいう動きをするのか、じゃあ人間はそこを突いてこう出たら、うまく検索できるかな」と「自分が仕事をするなら」ということを考えながら聞いています。

清水：【質問3】自己研鑽ということ言えば、私は人的ネットワークが主です。「サーチ

チャーの会」には 20 年位まえから所属しています。それとは別に勉強会を主催しています。この勉強会では、いつも開催案内に、「持ち物：興味」と書いていて、そこでいろいろな人の興味を見せていただき、もちろん「私の興味」も見ていただき、自分のブラッシュアップや情報収集などを行っています。

それから講習会の講師など、頼まれたことは勉強のチャンスだと捉えて、なるべく断らないでお引き受けするようにしています。

資格や検定制度について言いますと、サーチャーには資格や検定などの制度もあります。私も持っていますし、自己研鑽の一環として資格や認定のための勉強をするのは良いことだと思います。しかし、それが全てではないし最終目的でもないにとらえています。資格や認定をもっているからサーチャーの仕事に就けるわけではないですし、試験に合格したことで優秀なサーチャーになれるわけではないと思います。仕事をしているうちに、資格や認定にも合格できる力が付くのであり、資格や認定はあくまでも取得した時点での評価なので、実力を上げるも落とすもその後の自分次第だと思います。

中村：【質問3】自己研鑽のことについてもう1つ申し上げたいのですが。今は色々なセミナーが開催されておりまして。私はいつも部下の人達にセミナーに行ったときに報告をしてもらっています。そのときにセミナーの内容を通り一遍に報告してくる人もいますが、そういうものは自分の中で消化して貰えば良いことであり、私はあまり興味がありません。むしろ、どんな問題意識を持ってセミナーに臨んでいたのかを必ず問います。自分の業務の中でいつも具体的な問題意識を持っていると、セミナーに行ったときに得るものが全く違ってきます。粘着テープにいったいいくっ付いてくるような感じです。

清水：ここが聞きたいからこのセミナーに行くということですね。

中村：常にここが知りたいのだという気持ちを持って参加してもらいたい。私自身もセミナーに出るときは必ず具体的な問題意識を持って行きます。持てないセミナーには行かないです。

司会：中村さんのところでは部下から「こういうセミナーに行きたい」と言われたら、「じゃあ、どういうところを聞きに行きたいのですか」と質問になるわけですね。

中村：「どういう目的で行くのか」を必ず聞きます。新人などは別ですよ。データベースの操作を学びたいとかではなく、例えば講演会に行きたいなどというときに、「どういうことを期待していくの」と常に問うようにしています。セミナーは2時間や3時間など時間を取られますから、その意識を持っていただくだけでも、ずいぶん得られるものは変わってくると思います。

司会：目的意識を大切にしてセミナーに行く、大変参考になります。

サーチャーの最新情報入手法

司会：有難うございます。では、サーチャー自身の D0 の【質問 4】サーチツールや情報入手の方法に移りたいと思います。中村さんお願いします。

中村：【質問 4】皆さんから同じような内容のお話が出るとお思いますので、私の中で言っておきたいのは、この世界はネットワークがものすごく重要だということです。もちろんいろいろセミナー・本・ネットで調べるとかはありますが、このことはこの人に聞けという人脈をつくれるのはお勧めだと思います。

司会：何々のところは誰々に聞くと良いというやり方ですね。

中村：そうです。非常に情報調査の世界は狭い世界で、よく情報村社会なんて言われています。ですから、いろいろセミナーや講演会などをお聞きになって、ここはこの人が専門家だなというのを自分なりにリスト化して人脈を利用する。そういうことを聞かれて断る人は、この業界ではあまりいないと思うので、人脈形成は非常に重要なことだと思います。私はもっぱらそういうことで情報は入手しています。

司会：中村さんの人的ネットワークは社内だけではないですね。

中村：社外が多いですね。社内に関しても各部署のキーマンの方を活用させていただいていますが、このようなことは大事だと思います。

酒井：【質問 4】サーチツールと情報入手は、ある程度知財に近いところに絞った方が、これから勉強していくサーチャーの方には役に立つかと思しますので対象を絞ってお話ししますと、やっぱり「人」ですね。

私も中村さんと全く同感で、「人」です。ただ、私は人と違うことをやりたくなるタイプなので、海外で情報発信されている方のものは結構見えています。EPOなどは代表的なもので、どんなサーチャーの方もご覧になっているかと思えます。あと、意外と読者が少ないと思うものでは、大英図書館の知財部門の方が非常に面白いブログを書いています。アメリカでもサーチャーの方が、時々面白い記事を書いています。海外で実務をされている方が、どんなところに目を付けておられるのかというのは、日ごろされていることも違うし、使っている言語もツールも違うので、こんな見方もあるのだという形で勉強になっています。

司会：酒井さんは、アメリカの P I U G (Patent Information Users Group) の会員の中で Landon I P の Intellogist(註 3) のベストプラクティスのところの参考資料を見に行くと、「役立つ資料が見つかる」と話題になっていると、酒井さんご自身のホームページでコメントを付けておられましたね。そういうことなども、人のやらないことをやってみようとか、絶えずアメリカのサーチャーは何を考えているかなと見ておられるから、できるのですか。

酒井：PIUGに関しては、一昨年あたりから注目しており、特定の会議室に何か書き込みがあるとアラートが飛ぶようにプログラムを組んで見逃さないようにしています。

清水：【質問4】最新情報をどうやって得ているかについては、EPO ニュースレターをはじめ、いくつかプッシュ型の情報提供サービスを利用しています。あとは、やはり人的なネットワークです。サーチャーの会をはじめとする直接会って話してという社外の勉強会を活用しています。実際に会って顔見知りになることが大切で、そうすればメールでこれが困っているというのを出すと誰かが答えてくれます。そういうものにずいぶん助けられています。

例えば「米国の一部継続出願について教えてください」と出すと、自分が知っていることを返してくれる人がいます。そうなるには、ある程度お互いに知っている、または同じグループに所属しているという一体感が必要なのです。また教えてもらうばかりでは気が引けるので、メーリングリストに問い合わせが入ったときには、私の分かることはなるべく早く答えるように努力しています。

司会：サーチャーの会やOUG特許分科会なら分かりますが、ただ興味を持っている人たちのグループというか、そのようなグループにも入っておられるのですか。

清水：「八丁堀サーチャーの会」というのをやっています。サーチャー試験の2級に受かったときに有志を集めて1級を目指す勉強会として「八丁堀サーチャーの会」を立ち上げました。サーチャー試験は出題範囲が広範ですし、私の苦手な英語もありますし、1人で勉強しているとなかなか難しいのでみんなで集まってやろうじゃないか、お互いに教え合いましょうということで始めました。最初から色々な人が自分の得意のことで持ち寄って教え合うところからスタートしたので、今でも「持ち物は興味」ということになってやっています。そうすると本当にいろいろな情報が入ってきます。もう20年ぐらい続いています。この会は、今はサーチャーの会の分科会の一つになっています。

中村：知財情報系は「どこに行っても必ず同じ人がいる」というような感じですからね(笑)。ただ、人脈をつくるというのはけっこう努力が必要で、物おじせず、例えば感銘を受けたセミナーなどでは終わったら必ず本人のところに行って名刺交換をして、それで質問をしてくる、自分の思ったことを言うてくるということを私はやってきました。

司会：質問するだけではなくて自分の意見も言うてくるのですね。

中村：私は元々情報検索派ではなかったもので、最初は全く知識がありませんでした。そんな時でも終わった後にちょっと恥ずかしいけど、「自分はこう思ったのですが、どうでしょうか」ということを言いに行きました。

註3； Landon IP社とは米国の特許情報の調査会社である。設立当初は社内のサーチャー教育の共有教育資料であった各種DBの参考資料（非公開）が社外のサーチャーにも公開し

ている Forum サイト。通称、Intellogist。各種 DB の使い方のベストプラクティスが掲載されている。

<http://www.landon-ip.com/>

http://www.intellogist.com/wiki/Main_Page